

私を決めつけないで

岐阜市立藍川北中学校 3年

小金井 莉央那(こがねい りおな)

私は男の子みたいな服装が好きですが、女の子のような服装はどちらかというと苦手です。私が男の子の服に興味を示したとき、姉にからかわれたことがあります。そのとき私は、なぜか恥ずかしい気持ちになりました。「なぜ女である私が男子の服に興味を持ってはいけないのか」「なぜ、からかわれなければならないのか」私の中にはたくさんの疑問が浮かびました。そして、「私以外にも、このような気持ちを持った人がいるのではないか」とも感じました。

そのときに思い出したのが、「ジェンダーレス」という言葉でした。ジェンダーレスとは、あらゆる場面での「男性らしさ」「女性らしさ」といった境界を取り扱う考え方を意味しています。私はこの「女性らしさ」という言葉も苦手です。この言葉を苦手だと感じるようになったのは、服装の好みを自覚したときでした。今まででは、女の子だからという理由でなるべく女の子らしい服装をしてきました。しかし、中学生になると同時に、男の子みたいな服を着たいと強く思うようになりました。男友達の服装を見たり、ショッピングモールで服を見たりするときに、男の子の服の方が自分の好みに合っていると思うようになりました。私の心の中には、「男子の服を見たり着たりしたい」「人前では女の子の服装をしなければならない」という二つの相反する感情がありました。本当は「制服のスカートもあまり履きたくない」と思いながらも、「女子だから、スカートを履いた方がいいのかな」と自分の気持ちに矛盾を感じるようになりました。

きっとこれを聞いている人たちの中にも、私と同じような気持ちを持った人がいるではないでしょうか。そんな人たちのためにも、「もっと私を含めた社会全体が、ジェンダーレスというものを知っていかなければならぬ」と私は考えています。社会全体がこの言葉について正しく理解し、考えることができれば、男性女性に関係なく、誰もが住みやすい社会をつくれるのではないかでしょうか。ジェンダーレスだけではありません。この世界には、LGBTQ+という言葉もあります。LGBTQ+だからということで差別されてきた人も、社会全体が様々な生き方の違いを理解することで、誰もが安心し、そして楽しくこれから的生活を送ることができるのではないかでしょうか。

ダイバーシティに関わる調査結果を見ると、当事者の多くが、様々な理由で「本心を語ることに対して抵抗がある」と回答しています。つまり、当事者目線でみると、日本社会ではまだ受け入れ態勢が整っていないことが考えられます。だからこそ、今を生きる私達には何ができるのかを考え動き出し、当事者の方が安心して輝ける未来を作らなければならないと思います。

今私たち中学生にできることは限られていますが、まずは私たちが正しく理解することが必要です。私は今後、総合的な学習の時間に、これらの差別に関わる学習をする機会を作り、仲間と一緒に考えたいと思います。まず私たち中学生が「正しく知る」ために動き出したいです。

大人の皆さん、私たちは動き出します。でも、私達が変わろうとしても、それを社会が受け入れてくれなければ、この問題は解決できません。だから、当事者の思いを受け入れてください。当事者の抱える悩みを理解してください。「これまでこうだったから」「〇〇なんだから、こうしなさい」と言わないでください。目の前の一人一人をありのまま受け止めることが、誰もが幸せに生きられる社会をつくる第一歩になると信じています。